時論

「教育」から「学び」へ

激変の時代の大学とは

田中 優子

春は年度末、年度初めの季節。大学は学位授与式と入学式を行う。この時期、私はいつも「これからの時代の変化を、学生たちにどう伝えようか」と考える。激変が来る。しかもそれは、150年前の明治維新に匹敵するかもしれないのだ。

▽継承と変革

日本は今、人口減少の急坂をすべるように下っている。2040年ごろには、人工知能（AI）が人間を超える「シンギュラリティー（技術的特異点）」と呼ばれる一大変化が世界を見舞うという。未経験の事態。想像も難しい。しかし意欲ある若者にとっては、フロントランナーになるチャンスでもある。それを伝えたい。そして大学を、新しい時代に対応した学びの「場」にしたい。どうすれば可能だろうか？

ある先端企業は、今後必要とされる能力として、次のようなものを挙げる。いわく、多様なものの見方による新しい思考であり、コミュニケーション力と想像力の国際化であり、さらには人と活発に交わり、情熱と好奇心によってキャリアを積み上げる力である、と。

一方、別の企業は「先端IT人材」と「新たな価値を生み出すイノベーション人材」が必需だと予想する。コンピューターサイエンスの知識、AIやアルゴリズム（演算の手順）の技術をもつのが「先端IT人材」。そして「新たな価値を生み出すイノベーション人材」とは、社会的課題や取り組むべき価値ある問題を見つけて解決への道筋を示し、それを他者と共に実行するリーダーシップがあり、先端技術の利用価値を判断できる人、らしい。確かに、激変に対応するには、そのような能力が必要に違いない。

ただし、これらの能力は20歳やそこらで身につくはずはない。変化を受け止めながら、一生涯かけて習得するものだ。つまり大学は、多様な年齢の多様な人々が学び続けるための、社会的な場になる必要がある。

このところ、明治時代に本当は何が変わったのかに関心がある。江戸時代までは暗闇で、明治は夜明けだといった史観は問題外だ。前の時代からの継承があったからこそ、激変を受け止め、変革につなげることができたのである。

▽他者と共に

たとえば学びの方法だ。

法政大は、1880（明治13）年に20代の若者たちがつくった「東京法学社」が前身だ。当時の日本には2千もの結社があったとされ、新時代の市民が憲法制定と国会の開設をめざし、盛んに読書会を開き、演説会に集い、議論を重ねて、複数の憲法草案が生まれた。若者による学習結社の設立も、こうした流れに沿ったものといえる。

これは、幕末期に生まれ育った人々に、議論の力とイノベーションの意欲が備わっていたことを意味する。彼らが学んだ藩校や私塾には、議論を中心とした「会業」「会読」と呼ばれる学びの方法があった。学生が互いに講師を務め、他の学生が質問し、討論することで学びを深めたのである。

声を出すことを介して記憶する「素読」、身体に刻まれた言葉の意味を掘り下げる「講義」、学生が自ら講義し議論する「会読」。こうした学びのプロセスが、考える力をつける上で重要な役割を果たした。また、大半の藩校や私塾は武士以外の人々も学ぶことができ、年齢もさまざまだった。

明治に入ると、欧米の制度にならった「一斉教授方法」が導入されたが、それは読書や議論を通した「学び」の方法とは、根本が異なっていた。大人数に同じ内容を「教育」する新しい方法がもたらしたのは、教育の普及と底上げだった。

そして今、その成果に敬意を払いつつ私たちは、あらためて「教育」から「学び」に目を向け直す必要がある。多様な見方を生かした新しい思考も、想像力の国際化も、社会的課題の発見と価値ある問題設定にしても、自分と異質な他者が場を同じくして取り組む読書や議論を通じてこそ、鍛えられるものだからだ。

自らの学びをデザインし、議論を楽しみ、変化の過程を確認できるシステム、開かれた履修証明、複数の人々による評価…。こうした方向に発想を転換し、デジタル技術を援用する。激変の時代の大学には、そうしたことが求められているのだと思う。

（法政大総長）

たなか・ゆうこ氏　1952年横浜市生まれ。法政大大学院修了。2014年から現職。専攻は近世文学、アジア比較文化。著書に「江戸の想像力」「自由という広場」など。05年紫綬褒章。